

首都圏のページ

水路復活で東京の再生を

「江戸・東京の川 体感型博物館」

Key report

江戸文化を再評価し、復活させようという動きが次々と胎動している。そのエネルギーは行政を突き動かすほどになっている。多摩美術大(東京都八王子市)の渡部一二(わたべ・かずじ)教授を中心とする研究グループが提案する「江戸・東京の川 体感型博物館」もその一つ。江戸の水路を復活させ、東京再生につなげようという構想だ。

(小松勝彦)

渡部多摩美大教授が提案

渡部教授の専門とする水路研究の出発点は、都市計画に携わる夢を抱きながら大学に入学するため上京して、隅田川や日本橋川の無残な姿を目の当たりにした四十年前にあるという。

当時、川の重要性を説く教授はいなかった。そこで自ら地図とカメラ、スケッチブックを手にもって、川を生

水辺で浮世絵の風情楽しむ

え方とともに、水路を中心にした街づくりが広がった。前者の代表格が多摩川上水であり、後者が日本橋川だ。多摩川から水路で水を引き、武蔵野台地を潤し、自然の地形特性を讀んで家の近くまで水を取り込み利用した。だが、現在ではその多摩川上水はごく一部を残しほとんどつぶされてしまった。日本橋川もまた、水運機能を持つ江戸の大動脈としての面影はもはやない。

渡部教授が提案する「江戸・東京の川 体感型博物館」は、江戸の川をテーマにして描いたものが多くに気付いたことから始まる。浮世絵が描かれた場所を現在の地図に重ね、建築家などが残っている。江戸の庶民の食を味わうすし屋、そば屋もある。そして、三川に囲まれる三角地帯に点在する江戸の面影を残す展示資源を「発見・出会いの道」で結ぶ。

教授のこの構想は、安藤忠雄や高橋北斎などの浮世絵に、川をテーマにして描いたものが多くに気付いたことから始まる。浮世絵が描かれた場所を現在の地図に重ね、建築家などが残っている。江戸の庶民の食を味わうすし屋、そば屋もある。そして、三川に囲まれる三角地帯に点在する江戸の面影を残す展示資源を「発見・出会いの道」で結ぶ。



渡部一二教授



広重画「日本橋雪晴」。江戸の人々の営みや街並みをよく表す

構想は、日本橋川、神田川、隅田川の三つの川に九カ所の船着き場を設置し、川巡りを楽しみながら、江戸情緒、江戸文化を体験できる野外博物館だ。

船着き場には、資料展示の拠点となるサテライト(展示空間)があり、江戸にまつわる記念碑、川辺の散策路、イベントが開催できる広場を設ける。江戸時代の面影を最もよく伝えるのが浮世絵だ。浮世絵は江戸の庶民の心をつかむための風景や人々の表情を大胆な構図と繊細な線と色合いで生き生きと表現している。そこで渡部教授は、博物館を構成する上で浮世絵の力を活用することを思い付いた。

三川から引かれた水路の河岸(かし)の跡、倉庫や船宿の痕跡がある。これらはそれ自体が歴史を物語する資源だが、浮世絵が当時の全体像をイメージするのを手助けしてくれ、価値をさらに高めてくれる。「江戸・東京の川 体感型博物館」は、浮世絵の力があって成り立っているといっている。

教授は「水面に船を浮かべて浴衣で夕涼みをしたり、江戸前のすしをほお張る。浮世絵に描かれている江戸の人々の遊びを体験する体感型の博物館。とてもわくわくする」と目を輝かせて構想を紹介し、「御茶ノ水駅のプラットフォームからエレベーターで神田川の水辺に直接下りる。そこには船着き場があり、船で観光したり、通動することもあるようにしたい」と、夢を語る。

だが、江戸の川再生の最大のネックになっているのが、日本橋川を覆う首都高速道路だ。水路の機能が十分に生かされないし、个性的で名橋と評価が高い日本橋川に架かる多くの橋の景観を殺している。首都高の撤去は大きな課題だ。

ただ、同様の問題を克服した好例が韓国・ソウル市の例だ。ソウル市は繁華街・明洞地区近くを流れる清溪川をふさいでいた高速道路を老朽化に伴い撤去、昨年、新たな名所として復活させた。川辺には散策路が設けられ、噴水や壁画のある市民の憩いの場となっている。

教授は「このソウル市の果敢な取り組みを日本人に大いに学ばなければならない」という

に刺激を与えた」と評価。「海外では水路を利用した街づくりの実績が作られている。一方で、東京は何をしているんだという厳しい批判も国内から出ている」としながら、「こうした時代背景が水路を見直す動きを後押ししている。日本橋川がその旗印になるに違いない」と意を強くする。

渡部教授は学者や日本橋界隈(かいわい)の商店会の日本橋再生を求める動き掛けは政府をも動かし始めている。小泉純一郎首相が設置した私的諮問機関「日本橋川に空を取り戻す会」が今月十二日、首都高速の江戸橋・竹橋間約二キロを地下に移す案を軸に検討することを確認。近く最終報告書を首相に提出する方針だ。

だが、昨年十月に民営化したばかりの首都高速道路株式会社は、地下化案で四千億五千億円とみられる事業費について「負担できる原資はない」と断っている。

渡部教授は「水路の復活は大きな経済波及効果も伴うと考えている。今、ソウルの清溪川がもたらすさまざまな効果を調査、試算中だ」と述べ、資金問題も折り込み済みとしている。その上で「江戸の街は実に面白く魅力的だった。日本人が純粋に考え出した傑作が凝縮されているのが江戸文化だ。それを再評価することは、日本人の心を見直す契機となり、世界に発信していく文化の原点にもなる効果と価値がある」として、「江戸・東京の川 体感型博物館」構想の意義を強調した。

今、江戸の心と文化を見直すという動きが目覚ましい。